

アガサ・クリスティ作品の原題と邦題から内容を予測し題名の魅力を探る

国語班:馬場 彩夏

Abstract

The purpose of this study is revealing the charm of title. Title has some charm such as interesting power and ability to imagine the content. After that because of the difference between predicted content and actual content title has the power to make a story twice as fun. Moreover in Agatha Christie's novel what's easy to guess is the ending, what's hard to guess is the development I was often shocked.

要約

本研究の目的は、題名のもつ魅力を探ることである。題名には興味を惹く力と内容を想像させる力がある。また自分で予測した内容と実際の内容を比較すると差が生じることから物語を二度楽しませる力がある。加えてアガサ・クリスティの作品において内容を推測しやすいものは結末で、しにくいものは展開で衝撃を受けることが多かった。

1. はじめに

題名とは作品との最初の接点であり、その印象によって作品への興味が表れる。実際アガサクリスティの「そして誰もいなくなった」という題名に目を惹かれ、内容を無意識のうちに推測していた。このように題名には興味を惹く力と内容を想像させる力がある。本研究ではアガサクリスティの作品に注目し、題名の魅力を探った。

2. 研究手法

アガサ・クリスティはイギリスの作家であるので原題と邦題の両方について研究する。まず内容を知らないまま題名を見て内容を予測する。その後なぜこの題名をつけたのかということ念頭に起きながら読み進めていき、作者がその題名をつけた意味を探る。最後に予測したものと実際の内容を比較する。そして作者の題名の付け方の傾向を考えグループ化する。

3. 結果

原題と邦題に差は見られなかった。グループ化した結果、①「題名で結末を示すもの」、②「事件の舞台を題名とするもの」、③「ストーリー展開の鍵となるもの」、④「新たな単語を作って題名とするもの」の4つに分けることができた。②と③が多く、つまりアガサ・クリスティは題名で内容の小さなヒントを与えている。犯人は探偵とともに行動していたり、論理的に考えれば犯人候補から除外される人物など予想外な人物が犯人のことが多かったが、文中には読み返してみると小さなヒントが散りばめられており、きちんと辻褄が合うように描写されていた。

4. 考察

グループ化したこれら4つの特徴としては、内容のどこに重きをおいているのかと読み終わったあと考えてみれば、どれもそれぞれのパターンがストーリーの展開において重要だったように思える。またアガサ・クリスティはさまざまなパターンで題名をつけあらゆる読者の興味を惹き、読者の想像を膨らませつつ、予期せぬ展開によって読者をより一層物語に引き込ませたと考えられる。これがミステリーの女王と言われる所以であるだろう。また傾向として内容を推測しやすいものは結末で、推測しにくいものは展開で衝撃を受けることが多かった。

5. 結論

題名には、はじめに言ったように興味を惹く力と内容を想像させる力がある。その上推測した内容と実際の内容に差が生じる。その差によって物語を二度楽しむことができる。よって上記2つの他に物語をより楽しませる力がある。私自身が題名に興味を惹かれ始めた研究であったが、やはり題名は人の興味を惹いたり内容を推測させたりする力があつた。その力について本研究を通し深掘りすることができ

きた。物語中で推理されるまで気づかせないアガサ・クリスティの文才には驚かされるばかりであった。

6. 参考文献ならびに参考Webページ

そして誰もいなくなった(1939) アガサ・クリスティ
オリエント急行の殺人(1934) アガサ・クリスティ
ゼロ時間へ(1944) アガサ・クリスティ
アクロイド殺し(1926) アガサ・クリスティ
黄色いアイリス(1939) アガサ・クリスティ
死の猟犬(1933) アガサ・クリスティ